

在外教育施設（バンコク日本人学校）でゆめを育む児童生徒の育成

前バンコク日本人学校 教諭

静岡県浜松市立新原小学校 教諭 牧 澤 利 光

キーワード：国際理解，現地理解，教材化，研究

1. はじめに

バンコク日本人学校は、世界でも最古参（学校設立から50年以上）、最大規模（児童生徒2500人）の日本人学校である。本校の特色として、小中併設校である点、小学部6年生から教科担任制を採用している点、現地語であるタイ語が必修科目という点が挙げられる。それと共にネイティブの教員を派遣会社から雇用し、英会話の授業が小学部3年生から2時間以上実施している点が挙げられる。

だが、英語の必要性はタイ国内にいるとき必ずしも高くはなく、欧米にある教育施設やシンガポール、オーストラリア等と比べて帰国時の進学や就職等における英語力のアドバンテージは少なからずあるとは思えない。この国で生活し、バンコク日本人学校で学んだことを生涯に渡って生かせるようにするのが、私たちバンコク校の教員に与えられた使命であると考えた。そこで大切なのが、現地を理解し「好き」といえる子どもたちを育てることであり、もう一つが魅力ある授業・教育を展開することの2点であると考えた。教員研修では、テーマを「協同的に学び、ゆめを育む児童生徒の育成」とし、研究部長としてその職務にあたった。その実践内容を以下に紹介していく。

2. タイを「好き」といえる子どもたちの育成（小学部2・3年生において）

(1) 小学部2年生の校外学習

1年目は、2年生の担任であった。11月に行われる生活科の校外学習「のりのり乗りものたんけん」では、高架橋鉄道の「BTS」、地下鉄の「MRT」、高架橋鉄道でエアポートライナーでもある「ARL」と3つの鉄道を利用して目的地の公園や博物館に出かけていく。この学習や日常でこれらの電車を利用するときに驚いたことがある。それはこの国の人々が、電車の席を小さな子どもたちをはじめお年寄りなどの弱者に譲る習慣があるのだ。このことは、子どもたちの多くが「タイの人たちは優しい」と共有している点にある。実際に校外学習の際も混んでいる電車内で子どもたちが席を譲っていただく場面が見られた。

またMRTが日本のODAで開発され、2006年に開港したスワンナプーム国際空港が円借款で建設に至っている。これはガイド役の係員が、子どもたちに話して下さった内容から分かったことである。タイ王国と日本とのつながりの強さを垣間見た学習であり、治安のよさからこういった学習が計画されているのだということを再確認した。

(2) 小学部3年生の理科学習

2年目は、3年生担任であった。3年生の理科には、「チョウをそだてよう」という教材がある。日本のどこでもよく見られるモンシロチョウが教材として教科書で紹介されている。私たちは、その代わりに「カバマダラ」という熱帯のチョウを教材として扱っている。この「カバマダラ」の観察や調べ学習を進める中でびっくりしたことが2つある。1つ目は、幼虫時代に食べるえさの実に毒があること。それは、「トウワタ」といわれる植物である。この葉を主に食べて「カバマダラ」は育つのだが、その毒の実さえも好んで食べる昆虫であった（理由は、幼虫時代に吸収した毒で、鳥に食べられないようにするため）。

2つ目に、変態の際、サナギになったときの美しさである。外敵から身を守るために変色するのだが、透明な虫かごで変態したサナギは、宝石のような透明色になる。日本では学習ができない大変魅力的な学習素材であり、観

察への意欲やこの地で学ぶよさを発見できる教材であった。

3. タイで育む学ぶ意欲と世界観（小学部6年生の社会科において）

(1) 小学部6年生の歴史学習

平成22年度在任期間の最終年度。これまでタイについて調べ、各地を調査したことを子どもたちの学習として生かすよい機会に恵まれた。小学部6年生の社会科担当となったことである（ちなみに、バンコク日本人学校は小学部6年生から教科担任制をとっている）。

私がこの地で気になっていたことの一つに、なぜ、タイの人々がこれほどまでに日本人に対して好意的に受け止めているのかということであった。私はこれまで、アジア諸国（特に中国や韓国など）をはじめアメリカやイギリスなど多くの国々が日本人に対して、差別的な見方をしていると考えていた（それは、戦争の歴史によるものが大きい）。一方この国では、日本語の学習・日本文化または、風習などを受け入れる土壌が多岐に渡って見られるのである。この3年間後述するように、なぜタイ人がこのように日本人を受け入れるのか調べてきた。そういった日本とタイの接点から歴史を学べるように、年度当初から歴史学習の1単元ずつ終了するごとに、6年生児童全員（約250名）に「別冊資料」として配布し、学習に生かしてきた。

① 「弥生時代の土器より美しいバーンチエンの土器」

弥生時代の土器とユネスコの世界遺産にも登録されている東北部の村で発見された美しい土器の年代やつくられ方、使われ方の比較資料を掲載した。日本と同様に美しい曲線で作られた土器の形や模様には、子どもたちは日本との共通点を感じていた。



② 「奈良の大仏をしのぐ大仏たち」

仏教が生活の基盤にあるタイ社会。大きな涅槃仏（ワット・ポーは、長さ45m）と奈良の大仏（高さ16m）等の大きさや年代、つくられ方などの比較資料を掲載した。奈良の大仏の大きさは、教室の広さほどの顔という注釈が教科書にもものっているが、身近にあるタイのワットポーがそれよりはるかに大きいと知ると、驚きを隠せない子どもたちの反応が見られた。

日・タイの大仏を扱った別冊資料

③ 「ゾウにのった侍、山田長政」

長政が活躍したアユタヤと最後の時を迎えた南部の町に取材に行き、現地の方にインタビューを行った記事を掲載した。南部では、重要文化財として指定されている影絵師が現在でも「山田長政」の影絵を上演していること。また、その学習ときに山田長政を主人公とするタイ映画「THE SAMURAI OF AYUTHAYA」が公開されていたことがあげられる。



山田長政の活躍を扱った別冊資料

ちなみに、長政がタイに渡ってすぐ鎖国となったことも取り上げた。影絵師へのインタビューで、長政が貿易やタイ経済の発展に貢献したという記事を掲載すると、過去に在タイした日本人がタイの人々に感謝されていることが嬉しいと話す子どもの姿があった。

④ 「カンチャナブリの戦場にかける橋」

イギリス映画で有名なカンチャナブリにある泰緬鉄道の建設の歴史やそれにかかわる歴史的事実を掲載した資料

とした。日本の広島・長崎の原爆での被害者とこの鉄道建設にかかわって亡くなった方との資料比較（長崎の原爆被害者とほぼ同数）を行い、学習の幅を広げた。しかし、悲劇はあったにせよタイ国は第2次大戦中、欧米諸国の植民地になることを嫌い、日本と同盟を結ぶことによってそれを回避できたという事実がある。タイの国民の多くが、日本人に感謝していることを知ると、戦争の悲惨さだけでなく、別の角度からものを見ることの大切さを考えた児童もいた。

(2) 小学部6年生「世界の中の日本」の学習

在外教育施設で日本の子どもたちに学習を教える意義は、非常に深い。特に私にとって2度目の海外派遣であるということも考えて、1度目に派遣されたアメリカ合衆国での話題を取り上げることにした。

将来を見据えて世界の人々の立場を考え、日本人としての生き方や世界の人々とのかかわり方を学ばせたいと考え、授業構想をした。それは本校の子どもたちをはじめ、在外教育施設で学ぶ子どもたちが日本で学ぶ子どもたち以上に世界の人々の心情を理解しようとしたり、日本人としてのアイデンティティが豊かであったりすると考えたからである。ちなみに扱った学習素材は、2001年アメリカに私が派遣される際に起こった日米同時多発テロ及び日本人の青年海外協力隊の活躍である。



6年社会科「世界の中の日本」の授業

① 各国国民の考え方を知る

アメリカに派遣されていた当時、アフガニスタンへの派兵について現地の人々の意見を聞き、それを別冊資料として配付した。2つの世論があり、一つが派遣賛成、もう一つが派遣反対であった。資料から同時多発テロとアフガニスタン派兵によって失われた多くの犠牲を比較検討して自分の立場を明確にし、理由をまとめて話せるようにした。しかしこれは答えるのに大変難しいことであり、議論を重ねようとしても解決の糸口が見つからなかった。

② 海外で活躍する日本人を知る

本校にいる120名以上の教職員の中には、様々な経歴を持つものがある。特に、青年海外協力隊として活躍したことがある教師の話や資料とすることで、日本人が国際社会の一員としてできることを考えようとする姿があった。先ほどの授業で行った議論では、自分の考え方がまとまらず迷いが生まれたが、この学習では自分でできそうなことがあるのではないかと考えることができた。

③ 平和について考える

国際社会において、平和主義が必ず通るとは限らないことを知った子どもたちだが、日本人の立場からできることはないのか考えようとする気運が見られた。そこで学習の終わりに、国際平和会議で議長として活躍する緒方貞子さんの話や、ブッシュ元大統領とビンラディンが仲良く宇宙旅行しようとする絵画（タイの画家による）を紹介すると、他の国民も平和を求めているということが分かり、子どもたちの表情が明るくなった。

4. 校内研究・教職員研修

(1) 校内研究

校内研究実践においては、教育に携わる約120名の教師で校内研究を実施した。昨年度は、「協同的に学び、ゆめを育む児童生徒の育成～伝え合いを通じ、思考力を高める学習活動の工夫～」を研究テーマに各教科・領域ごと10の部会に分かれ、年間10回の教科等研究会を実施した。年間の最後には、研究発表会を行い、まとめの冊子を作成した。その中で教師の授業力向上や児童生徒自らが「問い」をもち、学習を進める魅力ある授業の構想を行い、教師同士で切磋琢磨し合ってきた。その一つが、前述の社会科における授業実践である。

(2) 職員研修・現地理解教育

本校教職員は、夏期休業を利用して、普段行けない現地の学校や施設に出向き、現地理解に努めている。昨年度は王宮周辺にある王立の学校に日本文化（日本の料理・書道・茶道など）を教えに行ったり、国立博物館やインター校の施設見学に出向いたりした。また、現地の講師を招き、現地料理や焼き物体験などを行った。

本校はどの学年も近隣の学校と提携し、1年に1度、児童生徒の文化交流を中心に互いの学校に行き来するなどする交流学習会を実施している。これらが、現地を理解し「好き」になるきっかけ作りとなっている。

(3) 教員宿泊研修

毎年、タイに於ける教職員の現地理解教育を促進させようと、担当として本校の窓口となり、タイの国境地域にある現地校に出向き、日本文化を伝える授業実践を行ってきた。夏期休業の2～3日を利用して出向き、折り紙、書道、日本の遊びや科学技術を現地の児童生徒は楽しみにしている。3年間で1周期で、タイ北部（チェンライ）・東北部（ノンカーイ）・タイ南部（ナコンシー・タマラート）の現地校を巡回する。

教職員宿泊研修で出向く学校は、国境沿いにある貧しい学校である。ノンカーイ県にある学校からは、メコン川の向こうにラオスが見える。また、チェンライ県は、ラオス・ミャンマーと隣接し、ゴールドトライアングルという貿易（麻薬が取引されるケースもある）が盛んなところである。南部ナコンシー・タマラート県のみ、国境と接していないが、ここは、仏教とイスラム教の境目の地域であり、これより南になると、イスラム社会が広がっている。ちなみに、昨年度訪れた学校は、イスラム教徒の学校であった。

このような活動の機会に現地に度々出向き、タイに住む方々のお話を聞かせていただいた。その多くは、私たちに対しての感謝のことばであり、現地の方々の温かさを肌で知る機会となった。



2010年5月燃えるバンコクの町

5. おわりに

在タイ時の2010年5月のタイ争乱では、日本人ジャーナリストが命を落とす事件を在任期間中に経験した。この際の報道等でタイ国では、命の価値が高いとはいえない治安状況があることを日本に露呈した。しかし私たちはそんな状況下でも2週間ほどの休校の後、無事に授業を再開した。今までやってきた教育が豊かで安全であり、間違いないものであるという確信があったからである。

争乱の1年前には、特別活動主任を経験し、「ゆめ集会」を企画した。その中で、キャリア教育の一環として自分の夢を思い描ける児童生徒を育ててきた。行事のスピーチの中で、当時6年生だった児童が「宇宙飛行士になりたい」という夢を語った。その後、国際宇宙ステーション司令官に任命されることになる若田光一さんが来校し、児童生徒の前で講話をしてくださった。

このようにバンコク校は子どもたちがゆめを育ていき、国際社会の中に生きる日本人を育てていく場であったと考えるのである。